

---

# 夜天の主は赤ん坊？

太刀・the・wonder

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜天の主は赤ん坊？

### 【Nコード】

N4358BA

### 【作者名】

太刀・the・wonder

### 【あらすじ】

もしも【闇の書】の主が「八神はやて」ではなかったら？

そんな妄想から生まれた物語。

処女作品・初投稿なので何とぞ御容赦を。気に入らなかつたら即撤退を。

第1ページ 目の前にいたのは・・・(前書き)

気まぐれで投稿しました。

## 第1ページ 目の前にいたのは……

漆黒の闇が世界を染める深夜

とある家の

とある部屋に

静寂が漂っていたその場所で

とある一冊の本が動いた。

「起動（anf ang）」

表紙に剣十字の印がある本が妖しい光を放ちながら宙に浮かび無機質な機械音声を発した。

放たれているのは光、しかも尋常ではないほどの輝き。

そして本の光が一層輝き、その前方に円を形どった幾学的紋様が現れ、さらにまた一層に輝き視界を白に染めた。

輝きが収まると、

そこには簡素な黒い服を着た4人の人物が跪き、頭を垂らしていた。

「闇の書の起動を確認しました」

桃色の髪をポニーテールにし、凜とした雰囲気纏っている女性

烈火の将 シグナムが言葉を発す。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」  
肩まであるプラチナブロンドの髪をし、母性を感じさせる女性

湖の騎士 シヤマルが言葉を続ける。

「夜天の主に集いし雲」

浅黒い肌に短い銀髪、その耳は人間のそれではなく獣の耳、獣の尻尾が付いている筋肉質の男性 盾の守護獣 ザフィーラが簡潔に述べる。

「ヴォルケンリッター 何なりと命令を」

紅い髪を二つのおさげにして、気の強い口調をしている幼い少女

鉄槌の騎士 ヴィータが最後に締めくくった。

“何なりと命令を”

いきなり本が宙に浮きながら輝き、4人の人物が表れて“何なりと命令を”と言われれば誰だって混乱してしまうに決まっている。

だが。

4人を主と呼ばせているであろう存在である人物が口を開き

「はは」

と、一文字の言葉を告げた



窘める。将と言われるだけあってその姿はまさにその名に恥じないものであった。

とは言っても彼女も先ほどの“ばぶ”という発言がどういうものなのかはわからなかった。それに主から発した声、“心なしか幼子の声”だったような？・・・そんなことを考えていた。

「主、先ほどの命令はどういうっ

」

故に命令と姿の確認をしようと下げていた頭を上げて主の顔を見て・・・絶句した。

「ん？どうしたんだよシグナ・・・ム」

「え？・・・」

「な・・・に」

シグナムが急に黙ったので何事かと全員頭を上げてみると、皆呆けたような顔をしてしまった。

なぜなら

なぜなら、そのいたのは

「ぶいー」



年端もいかない赤ん坊だったのだから。

第1ページ 目の前にいたのは・・・（後書き）

次に投稿できるのが何時になるかわかりません（泣）

何となく頭の中で構想は出来ても思うように文章にできない・・・

・

・

頑張ってみたいと思います。

第2ページ 我慢と忍耐は違う(前書き)

勢いそのまま書いてみたら何とか形に出来ました。

至らぬ点はたくさんあると思いますがよろしく願います。

## 第2ページ 我慢と忍耐は違う

### 【闇の書】

魔導士の魔力と魔法資質を奪うため、その源である【リンカ コア】を蒐集する魔導書型のデバイスである。【リンカ コア】を蒐集する毎に頁が埋まり、最終頁666頁まで埋めると主に大いなる力が与えられると言われる。他にも【闇の書】には転生機能というものがあり主が死亡すればまた新しい主の元へと転生する。転生先には【闇の書】の魔力資質と合致する者をランダム（・・・）で（・・・）選ぶ（・・・）。様々な主の元を渡り歩き、その力を振るってきた【闇の書】。

その今回の主はと言うと・・・

ゴシゴシ

「うー」

ゴシゴシゴシ

「まっぴー」

ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ

「ぶうー」

・・・何度眼をこすつても目の前の現実が変わらなかった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

部屋の中は沈黙が続き・・・いや4人の主(?)は幼児語で何やら喋っているが・・・周りの空気が静寂とも何とも形容しがたいものとなっている。第3者が見れば“永遠にこの状態が続くのでは?”と思うに違いない。

周りを見ると、この部屋には畳が敷かれており、仕切りには襖、壁には掛け軸などがあり広さは16畳ほどの和室であるのがわかる。そんな部屋のゆりかごの中にその赤ん坊はいた。

シグナム、シャマル、ザファイラ、ヴィータはヴォルケンリッター守護騎士と呼ばれる

【闇の書】の守護騎士システム(プロگرام)である。【闇の書】に合わせて魔法技術で作られた疑似人体。その体は生粋の肉体ではなく、魔力で構成されたものだ。彼らは【闇の書】と共に歴代の主達に仕え、護衛し、命令に従って行動してきた。長い時を生きいき様々な主に仕えてきた彼らだったが今回の主には動揺を隠せなかった。

「え?ちょッ、までよ。え?・・・ま、まさか目の前のコイツが

主なのか?!」

「待てヴィータ。・・・主をこいつ呼ばわりするな」

「イヤ、だつてよ」

思わず念話ではなく直接口で喋ってしまったヴィータをシグナムが窘める。とは言ってもシグナム自身その顔に動揺が見てとれる。ヴィータは信じられないという思いで目の前の赤ん坊を見る。薄桃色の双眸にアリスブルーの髪。いきなり4人の人間が（厳密にはプログラムが）現れたにも関わらずこの状況に泣き声も叫び声もせずただヴォルケンリッター達を見つめているその姿は余程の大物という事なのか・・・いや、この状況をなにも理解していないという事か・・・。

「我々とのパスは確かに感じられる。つまり」

「この子が今代の主・・・という事で間違いないわね」

「はい」

ザフィーラとシャマルの確認の言葉に赤ん坊が“その通りだ”と言うように返事(?)をした。

ヴォルケンリッターの4人は闇の書の“第一覚醒”を以ってして現れる。その後の4人の活動維持にはごく僅かとはいえ主の魔力を使用している。

“ごく僅か”。しかしそれがまだ赤ん坊にとってどれだけの負担になるのか4人は理解しているつもりだ。それをこの歳ではまだ未成熟であるはずの【リンカ コア】でやってのけている。つまりそれだけ魔法の才能に恵まれているという事か、それとも魔導士になる

べくして生まれてきたと言っべきか。  
どちらにしてもこの赤ん坊がかなりの規格外な存在である事は確か  
だった。

しかし、

「でもさ、どうすんだよ？“命令を”って言っても命令どころかま  
ともな言葉すら返ってこねえぞ？」

「それは……」

「確かにね……」

「むう」

「ぶう」

いくら規格外な存在とはいえ赤ん坊だ。今みたいに会話によるコミ  
ュニケーションがままならないのは明らかである。先にも述べたよ  
うに守護騎士の役割は主の命令を従い、蒐集を行い御身を守ること  
だ。主を守る事に関しては問題はないが蒐集などの命令をもらって  
行動を起こす事に関してはどうしようもないとしか言いようがない。

(？、アレ？)

誰もがどうしたものかと思案している中でヴィータは少し疑問を抱  
いていた。

(コイツからの供給は確かに感じられるけど……？)

赤ん坊を見て、それから自分の胸の辺りを手に当てながら見やる。  
その姿は疑問

違和感を感じているように見える。

(コイツから供給されてるのって本当に魔力か(.....)?)

いや、確かに魔力は渡されているのだが何か魔力ではないのモノ

魔力以外の何かが一緒になって混じって供給されているような感じがする。ソレはまるで体の中を弄くっているような違和感を与えているのだが嫌悪感は全くしないという不思議な感覚をもたらしていた。この感覚は主とのパスを疑った上で意識を集中させないと気付かないレベルのものだ。この赤ん坊が本当に主なのかと一番疑念を抱いているヴィータだからこそ一番に気付いた違和感と言える。そしてヴィータ以外の3人はこの事に気づいている様子は見受けられない。

なので

「なあ、みんな」

「おーいリリネット。おまえの部屋から光やら何やらが出てきた気がするんだが.....って、ん？」



ヴィータが気付いた違和感を3人に伝えるため。そして3人にもこの違和感があるのか、色々と話したいことが出来たのでそれを口にしようとした時。

1人の男が眠たげで気だるげな声をだしながら襖を開けてきた。

肩まで伸びている黒髪にふてぶてしい双眸、顎にちよび髭が生えており黒い波模様がある白の浴衣を着た格好をしている中年の男だ。彼の容姿は赤ん坊とは似ても似つかないが、ここが家である事を考えると……おそらくは赤ん坊の父親なのか？と推測できる。

「誰だいアンタ等？」

と、気だるげな調子で言った。

.....  
.....  
.....

.....

先ほどの部屋から移動して5人・・・いや6人は現在家の居間に集まっている。中年の男は居間で話を、といった調子でここまで移動してきた。居間はさっきの部屋と同じ畳が敷かれている。広さは30畳ほどあり、外には小さな池があるほどの庭。庭へと繋がる縁側も見られ、どこかの旅館や武家屋敷を思わせる造りになっている。

そんな居間でヴォルケンリッターの4人は置かれてあった長テーブルの前に座って待っていた。

『風格のある家ね』

『ああ、古めかしくもあるが・・・この独特の造りと匂いは心が落ち着くな』

シグナムとシャマルは今いるこの家の感想を念話で言いあっていた。彼女達の記憶にある次元世界【ベルカ】の家の知識と比べてみるとこの家を見た事も無いものだらけなのだろう。

中年の男は居間へ案内するなりとりあえずお茶という事で台所に向かい作業をしている。深夜にも関わらずに客人を持って成すのは見た目と違って礼儀正しいのか、それともズレているのか。  
ちなみに件の赤ん坊は彼の背中におぶられている。

『・・・なあ、アイツが赤　　主の父親だよな？』

『多分そうだと思うけど、どうかしたのヴィータちゃん？』

『何かあったか？』

『イヤ、さつきから注意して見てただけど、隙だらけすぎるっつうか……』

時間はすでに深夜を回っている。にも拘らず突然現れた黒ずくめの4人組に対して不審がるどころか警戒すらせずお茶を用意している。警戒やら何やらそうすること自体必要無いという気配オーラがこの男から感じる。

『なんか得体がしねえんだよな』

『確かにそうだが、下手に騒がれるよりかはマシだろう』

『そうね。説明とかしないといけないだろうし』

『うむ』

本来なら主以外の者に【闇の書】に関する説明をする義理はないが今の主が主（赤ん坊）なだけにそういうわけにはいかないだろう。それに彼は父親おやだろうし全くの無関係という訳ではない。

『とにかく今は彼と話をするのが最優先事項だろう。今後の事はその後で決めればいい』

『ええ』

『心得た』

『・・・・・・・・ああ』

将の言葉に全員が頷く。ヴィータは先ほどの部屋で気付いた違和感が気になるのか渋々といった感じである。しかし現状ではそれが良いだろうと思っただのでとりあえずは置いておく事にした。

と、念話で話をしてしていると男が台所からお茶の乗ったお盆を持って戻ってきた。4人とは対面になるように長テーブルの前に胡坐をかき背負った赤ん坊を前へと移動させて自分の膝に置きお盆を長テーブルの上に置いた。

「とりあえず粗茶だが飲んでくれ」

「まーっ」

「何？《粗末な茶を出すな》って？おいおい粗茶ってえのは客に出すお茶の呼称であって粗末な物じゃないんだぜ？」

「だあーぶ」

「あ？《紛らわしいこというな》って？いやいやそれはお前がただ単語の勉強をしてねえからだ。俺の所為じゃねえだろ」

「ぶ」

「は？《教えなかったスタークが悪い》って？まてまてそういうのは自分の人生の中で学ぶもんだろ？俺が教える事じゃねえ」

『・・・・・・・・コイツ等何やってんだ？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

お茶を配りながら男は赤ん坊と口喧嘩(?)をしだした。赤ん坊と話が出来るわけがないと思うのだがこの2人のやりとりは本当に話をしているようにも見えた。この歳じゃ単語以前の勉強をしなければいけないじゃ?とツッコんだほうがいいのか?いや、やっぱりこれはふざけているのか?それともおちよくっているのか?という疑問も沸く。とにかく4人にはこの男の真意がよくわからなかった。

「あ、あの〜」

「ん?あー悪いコイツがあんまりにも理不尽な事を言うもんだから、つい熱くなっちゃった」

「は、はあ・・・」

遠慮がちに話しに割り込んだシャマルにあくまでも話をしていたという男の言葉でますます困惑した。まさか本当にOHANASHI・・・いや、話をしていたというのか?

「とりあえず自己紹介からか、俺はスターク・ジンジャーバック。こっちは息子(俺のガキ)のリリネット」

「ばい」

よくわからないが何だかスル された気分だ。  
ツッコミたい気もしたが話が脱線しそうなので4人も名乗ることにした。

「我々は守護騎士<sup>ヴォルケンリッター</sup>。」

そして私は烈火の将 シグナムです」

「湖の騎士 シヤマルです」

「盾の守護獣 ザフィーラ」

「……鉄槌の騎士 ヴィータ」

簡潔な自己紹介をして、男      スタークは首を傾げながら質問した。

「ヴおるけんりったー？将？騎士？守護獣？アンタ等どつかの騎士団なのかい？というか何でコイツ（リリネット）の前でんな格好して跪いてたんだ？押しかけ騎士団なのかい？それともなんちゃって騎士団なのかい？」

「い、いえその、何て言うか……」

声質は相変わらず気だるそうだがここぞとばかりに疑問を述べてくる。今でも面倒くさそうな<sup>オーラ</sup>気配を醸し出していたが、やはり息子のことが心配なのか口が饒舌になっている。この変化にシヤマルは焦りながら何とか答えようとしていた。が

「シヤマル。ここは私が説明する」

そんなシヤマルに助け船を出したのがシグナムだった。今の彼女の状態で説明をさせるのは無理だと判断したのだろう。凜然とした態度でシグナムは自分達の説明をした。



までであった面倒くさい気配オーラは少し控えられ、代わりに真面目ともいえる雰囲気を出している。

「それで今回の【闇の書】の主にリリネットが選ばれた。……  
つてことかい？」

「はい。そうなります」

「にしてもなんで主に乳飲み子のコイツがき(リリネット)が選ばれたんだ？【闇の書】はシヨタコンに近い何かなのか？」

「は？……しよた、こん？」

「いや、何でもない。態々覚える意味もねえし……てかランダム  
つて言ってたか」

「はあ……」

シグナムは答えながら考える。

……覚える意味もないものをどうしてこの男は覚えているんだ？と疑問を抱くのは自分だけだろうか？

話をしてみて思ったがこの男の独特のくだけた喋りはこちらのペースを乱していつの間にか自分のペースに乗っ取って話を進めている感じがする。自分が混乱せぬようにしているのか、それともこちらに話の主導権を渡したくないのか。まあこれは息子に関わる事であるから今日会ったばかりの我々に好き勝手に決められたくないというところかもしれない。

シグナムは冷静にスタークを分析していた。

「しかし【闇の書】に選ばれたってことはリリネットは魔法が使える



て、それを使う為に必要な【リンカ コア】ってのを持ってるってことになるよな？だが俺は【リンカ コア】なんてモン持ってねえが……【リンカ コア】は突然変異で生まれるものなのかい？」

「いえ、その……【リンカ コア】はいまだに謎が多い部分があつて断定できる事項が少ないんですけど、普通は遺伝的に発生すると言われてますが例外的に突然変異で生まれるケースもあつて、そういう場合は遺伝的なものよりも高い魔法資質を持っているのが多いんです」

「なるほど……ね」

シヤマルの説明で納得したようにスタークはテーブルに置かれてある【闇の書】を持ちながら答えた。その眼は【闇の書】に向けられており何かを考えるように睨んでいた。その瞳はギラギラと光り、鷹の眼のように鋭くなっている。

「アレ（……）はリリネットじゃなくてコレ目当てってことかも？……だが主以外に【闇の書】は使えない……」

「え？」

「いや、こつちの話だ。 【闇の書】か、いつの間にかリリネットが持ってたからどっから呼び寄せたんだって思ってたが、まさかこの本からやって来たとはな」

鋭い目つきで何かを言っていたが、再び気だるげな気配を醸し出した。今までの様子と明らかに違う豹変ぶりに驚いたがすぐに引っ込めたので余韻を引きずらなかった。

「まあ疑問に思う事はまだ色々あるが、今はもう晚いしとりあえず寝ようぜ。つつかコイツ寝ちまってるし」

「ZZZZZ」

時刻はすでに深夜過ぎ。子供　ましてや赤ん坊ならばとっくに寝ている時間帯だ。

「幸い家は広いし部屋はメツチャある。その縁側をまつすぐ行って右に曲がった廊下に部屋があるからそこで好きなところを自分の部屋にしてくれて構わねえ」

「い、いやちよつと待つてくださいスターク殿」

シグナムが焦つてとめる。何だか勝手に決められているが幾ら主の父だからって従う謂われはない。ヴォルケンリッターが従うのは主のみ。

その旨を伝えると。

「従うたって赤ん坊にどう命令を聞いて従うんだよ？」

「それは……しかし我々は」

「主の身の護衛と【闇の書】の蒐集の役目があるって言いたいのかい？前半に関しては別に言う事はないが、後半に関しちゃ否だ。聞いたところ蒐集は人さまの【リンカ コア】から魔力を奪うんだよな？他人に迷惑をかけることになるし下手すりゃ命に関わるだろ？」

身体から放出している魔力を蒐集するならともかく、その魔力を生

みだす源である【リンカ コア】から直接蒐集するのはかなり危険だ。魔導の生命機関ともいえる【リンカ コア】は魔導士にとつては内臓に等しい。普通の人間に例えるなら心臓を取り出してそこから血液を採取するようなものだろう。拡大解釈であるがスタークからすれば似たようなものだった。蒐集した結果は、魔法が使えなくなるか・・・最悪死ぬか・・・彼はそう結論付けた。

「倫理的にどうか世間的にどうかは兎も角、アンタ等はそんな命に関わる業をコイツに背負わせる気かい？」

「……」

「……」

今回の主は幼い 幼すぎる赤ん坊だ。その小さな体で命を背負うには命は重すぎる。赤ん坊だから命のやり取りなんて何もわからないだろうがそんなのは問題ではない。ヴォルケンリッター自分達が蒐集するのは主のため。ならその責任は最終的に主に責められるだろう。自分達の勝手に本人の意思を無視して罪を背負わせる 許せる事ではない。それが幼子なら尚更……

「主に忠節を働くのは立派だ。蒐集も戦いもアンタ等の存在意義でもあるんだろ。俺に言われるまでもなく……だがよ、今のアンタ等の意義は今の主であるコイツのためになるのか？」

ヴォルケンリッター達は何も言えなかった。

シグナム達は長く生きた中で蒐集を行い続けた。そんな中で自分達はただ主の命令に従い相手の命も考えずに蒐集したと言つてもいい。それが原因で命を落とした者たちも少なくない。彼らも好きで命を

奪ってきたわけではない。主の命令に逆らう気はなかったし騎士として戦いに心躍ることだって確かにあった。

だが蒐集行為に、戦争に 戦場で戦う自分達に何かしら思う事はあった。

「アンタ等がそれしか知らねえって言うなら、いい機会だ。何が主のためになるのか自分で考えて、自分の思った通りに、好きに行動してみるよ」

そう言われても……と、守護騎士達は戸惑った。

今まで主の命令だけに従い行動した。それをいきなり自分の好きにしていると言われたらどうすればいいかわからない。加えてスタークからはこちらを気遣う気を感じる。同情でもなく哀れみでもなく、ただ純粹に案じている。この男は見た目のギャップが激しいがお人好しなのかもしれない。

だが人の好意というものに守護騎士達は不慣れだった。

「まっ、急に偉そうに言うなって話かもだけどよ、こういうのは時間の問題でもある。とりあえず今日は眠っとけ」

「……………」

シグナム、シャマル、ザフィーラはそれぞれにまだ納得した訳ではないが今はスタークの言葉に従ってもいい。そう思っていた3人だった……が

「待てよ」

最後の1人。ヴィータはまだ納得していない様子だった。

「ヴィータ？」

「ヴィータちゃん？」

「どうした？」

3人は疑問符を浮かべる。

ヴィータは4人の中で1番外見も精神も幼いと言っている。長く生きた中で戦い、蒐集してきたこの少女はかなり荒れていた。戦場に感化され蒐集対象を誤って殺してしまいそんな事もしばしばあり仲間のヴォルケンリッター達でさえ心を閉ざしている傾向が見れた。ヴィータにとってこの状況は主じゃない人間が好き勝手に決めていく不愉快なモノなのだろうか。

「なんだ？何か言いたい事があるのかい？トイレならその障子を出て左に進んだところにある」

「ちげーよッ！こんな空気で、ンなくだらねえ事言うかッ！！」

「恥ずかしがる事じゃねえぞ？

いいか？トイレを我慢すると残尿感を感じるようになったり、結石も出来やすくなる。最悪の場合は膀胱炎や腎盂腎炎つつつた病気にもなる。悪いことは言わねえ。行ってこいって」

「だからちげーよッ！勝手に決め付けんなッ！つか何言ってるのか全然わかんねえぞ!？」

「待て！落ちつけヴィータ！」

身を乗り出してスタークに突っかかるうとするヴィータを宥めるシグナム。

「……………重くなりかけた空気が何処へやらに行ってしまった。」

「あー悪い悪い。んで何なんだ？」

スタークが軽く謝って質問を促す。気を取り直してヴィータは言った。

「アンタ、何者だ？」

## 第2ページ 我慢と忍耐は違う（後書き）

小説について

書いてみてわかりますけど、やっぱり小説書くのって難しいです（汗）

心理描写・背景描写など挙げてみたらキリがありません。勢い任せてプロットなんて作ってない自分は論外なんだと痛感しました。

自分は リリカルなのはA's しか見たことがなくて、あとはwikiしか見てません。この点を含めて独自設定・ご都合主義が出来しまう……すいません。

更新はかなり遅くなると思うので気の向いたときにこの作品を見た方がいいかもです。

キャラについて

シグナムとザフィーラのしゃべり方って似てると思うのは自分だけでしょうか？この二人の区別が難しいと思いました。

この作品のリリネットは男の娘です（赤ん坊だけど）

スタークってこんなキャラだっけ？自分で言うのもなんだが 銀魂の銀さんみたいだな、というよりこの作品のスタークとリリネットは 銀魂 の銀さんと勘七郎をモデルにしていますから当然か……  
……平行世界設定ということで 都合主義発動

ヴィータは膀胱炎とか知らないですよね？

今回は・・・いつだろうか・・・

とりあえずご都合主義と独自設定とチート化があると思うので嫌いな人は撤退をお願いします。



第3ページ 同類？（前書き）

寝ぼけながら更新しました・・・

誤字やら何やらがあるかもです・・・

### 第3ページ 同類？

8畳の和室部屋。

そこには木製の座卓とタンスが置いてあるだけで見るからに寂寥感が漂っていたが、月の光が襖を白く光らせ微弱な照明を作り出し、なんとも神秘的な雰囲気を出している。

そんな所でヴィータは布団の中に入り、天井を眺めていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

別に天井に何か有る訳ではない。その顔は思案を巡らせているように見える。

先ほどの話がまだ頭の中に残り続け、眠りへの誘いを妨げているようだ。

「六導」・・・・・・・・か」

そしてその思考は先ほどの話へと思い浸った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

「何者だ、か……その質問の意味はなんだ？」

「言葉通りの意味だ。アンタが何者か、それ以上も以下もねえよ」

重くなりかけた空気が何処かへ消えたと思ったたら再び戻ってきた。  
ヴィータの鋭い視線、そして質問によって。

「？」

「えっと……」

「どついう事だヴィータ？」

「だから言葉通りの意味だよ、何度も言わせんな」

ヴィータの言葉に3人は押し黙る。てつきり先ほどのスタークの言葉に反論するのかと思っただがヴィータが言ったのはスターク自身についてだった。

他人にあまり関わろうとしないヴィータが個人について聞くなんて珍しかった。

「どうしてそんな質問を？理由があるなら聞きたいんだが？」

「赤　　主とのパスを確認したのがまず最初だ」

ヴィータは言った。

主とヴォルケンリッターを繋ぐパスに魔力以外の何かが一緒になって供給されている事に。

そして自分以外、シグナム、シャマル、ザフィーラはどうなんだと聞いた。

「む？」

「え？ちよつと待って……………あれ？」

「何だ……………これは？」

言われて初めて3人はその異常に気付いた。魔力と似たようなモノが自分達の体に流れている事に、まるで生きているかのよう。

そしてこれはヴィータにしかわからなかったがその力は前よりも僅かにだが大きくなっていった。

にも拘らず意識を集中させないと見逃してしまうという矛盾。

大きくなっていくのに違和感がないこの感覚は何なんだと疑問が尽

きなかった。

「ふむ……」

「集中しないとわからないクセにコレの存在感はデケエ。このワケのわからねえモンが何なのか、気になって寝れやしねえよ」

「なるほど、だがそれだと“リリネットが何者か？”って話だよな？ “俺が何者か”って話にはならないんじゃないか？」

ヴィータが言っているのはあくまでリリネットとの繋がりについての事。

スタークはこの件に関しては何ら関わりがないはずである。

「アンタ、闇の書のこと話してる時にこう言ったよな？ “この本から来たとはな” “てっきりリリネットが呼んだと思った”って……これってつまり主が闇の書を引き寄せるみてえな力が有るって聞こえるよな？」

「む」

「あ……」

ザフィーラとシャマルが先ほどの会話を思い出す。

“どこから持って来たんだ”と言ったのならさほど気にならないが“どこから呼び寄せたんだ”ではどうにも不自然さが否めない。3人はあの時、スタークの目つきが気になって気に留めなかったのだ。

「そう考えるとアンタはその力に心当たりがあるだけなのか

一旦止め、スタークを睨み据えて言った。

「アンタ自身がそういう力を持つてるって事じゃねえか？」

説明を省いたがヴィータはこの推測を裏付けるものがあつた。スタークがリンカーコアの質問をした時、スタークは“自分はリンカーコアは無い”とはつきり言った。スタークが本当に唯の人間なら自身のリンカーコアの有無については何も触れないはず。というよりも有るか無いかなんて知りようがない。つまりスタークは何らかの方法でリンカーコアの有無を調べる事ができるのではとヴィータは思ったのだ。

「ほお・・・見かけによらず中々鋭いな。てつきり、いきなり人を襲いかかった挙句に反撃されて逆ギレするみたいに感情的に動く奴だと思つてたのに」

「ウツセーよツ！何でそんなやたらとピンポイントなたとえの仕方してんだよツ！・・・って何だよシグナム？」

シグナムが　否、シグナム達がヴィータを見て瞠目している。ヴィータが他人に関心しているのも珍しいのに、さらに相手の正体についてここまで推測しているとは思ひもしなかったのだろう。

「いや、お前に言われるまでその事に気が付かなかつた・・・どうやら今回の事で思っていた以上に動揺していたようだ。将失格だな・・・」

「あんなの将じゃなくても動揺するだろ」

生真面目に自分の失策を自嘲するシグナムにヴィータは素っ気なく返すがその言葉には僅かながら気遣いが感じられた。

「で、どうなんだよ？」

スタークを見据えて問うた。

“心当たりがあるだけ”か“自身が持っている”か。

つまり両方であると。

先ほどヴィータはスタークを“隙だらけ”“得体のしれない奴”と思っていたが今では“得体が知れない奴”とだけになっている。

自分の体の中を廻っている“ナニか”。そしてスタークの言動。それがヴィータの本来持っている気性の激しさを鎮静させて動くに動けない状態に陥ってしまった。仮にスタークと戦う羽目になったら、たとえ隙だらけでも動けない状態になるだろうと騎士の本能で感じた。

そしてスタークの答えは

「お前さんの言う通りだ。心当たりがあるし、俺もその力がある」

「……ッ!!」「」「」

あっさりと肯定した。

誤魔化しがきかないと思ったのか、それとも別の理由か

スタークを見た目で判断すると、どんな事も何も考えずに成るがままに事態をそのまま放置しておきそうな人物だが……

これまでの行為から何か有るのかと考え、思わず身構えてしまう4人。

「先に言っとくが別に隠そうとしたわけでもなければ謀ろうとした

わけでもねえ

「……………面倒くさかったただけだ」

「そっちの方がタチ悪いぞオイツ！！」

「ヴィ、ヴィータちゃん落ち着いて！！」

また身を乗り出してツツコミを入れようとするヴィータをシャマルが窘めた。

今まで見た目で裏切られたから何か理由があったのかと思っていたが見事に違う意味で裏切られた。少なからず謀りがあったのかと勘繰っていたが、どうやら考えるだけバカバカしいようだった。

本当なら適当にはぐらかしていると疑うところだろうがこの無気力感あふれる男を見ると自然と納得してしまう。

この男、策士に向いているのかもしれない。

「冗談だよ。まあ少しくらいはあるが、別に話す必要は無いだろうって思ったから黙ってただけだ」

「……………」

「」

絶対に面倒くさいのが本音だろと思うのは全員の思いだ。そもそも話す必要は無いと思った、というのは要するに面倒だからという気



持ちから発生したものでろうと全員看破した。ここまで4人の思考がシンク口したのは生まれて初めてかもしれない。突っ込みたい衝動にも駆られたが今まさに話そうとしているので口を噤んだ。

「スターク殿、その力というのはどのようなものなのですか？」

「あー、まずは実際に見せよう。その方が説明しやすい」

そう答えてからスタークはテーブルの目に前に置かれている湯呑に右手の手先を触れさせた。

「じゃっ、全員この湯呑を見てろよ」

「……？」

一体何をするのかと疑問に思いながら守護騎士達は手先を添えた湯呑を見る。見たところ何の変哲もない唯の湯呑だ。中身のお茶はまだ半分ほど残っている。

黙って見ていること数秒

「……?!?ッ」「」

突然湯呑が青白く光りだした。

その光はゆらゆらと陽炎の様に立ち上り、そのままスタークの口の中へ吸い込まれるように入っていた。

全ての光を吸い込むと湯呑は跡型も無く消えさり、中に入っていたお茶がテーブルへとこぼれた。

「……な

?!!

!」

守護騎士達は驚愕を言葉にできなかった。

いったい何が起きたのか、全くわからなかった。

今の一連の動作に何らおかしい処は無かった。無論、魔力反応も皆無だった。だとしたら、稀少<sup>レア</sup>能力か?とも思ったがそれにしただって魔力の使用は絶対必須のはずであるしスタークはリンカ コアがないと言っている(確かめてはいないが)。

では今のは何だ?

疑問が頭を埋め尽くしていると。

「今のは“餓鬼導”で湯呑の“魂”を根こそぎ喰らったんだ」

スタークが淡々と今の現象について説明した。

「ガキドウ?.....タマシイ?.....」

ヴィータは呆然と述べられた語句を聞き返す。

それは一体何なのかと暗に聞いている。

「ああ。

俺は、“あらゆる魂を使役できる

”ってな感じの力を持つてる」

「「「「「?????」「」「」

「あー、意味わかんねえって顔だな。使役っていうと範囲が狭まれるか………“魂で色々な事ができる”って言った方がわかりやすいか？」

「「「「「?????」「」「」  
「「「「「?????」「」「」

「悪かった、そっちから質問してくれ」

この状態では満足に説明できないと判断したスタークは質問の舵を守護騎士に委ねた。

まず何がわからないのかを聞かなければ説明はできないし、さらなる混乱引き寄せるからだ。

………決して面倒くさいから舵を投げ出したとかでは無いはずだ。

「えっと　　魂って、人の中にある……幽霊みたいなやつですよね？」

「厳密に言つとちよつと違うが、今はその認識でかまわねえ」

「スターク殿はそれで色んな事が出来る、と？」

「そうだ。さっきのをちよつと詳しく言つと、湯呑の魂を引っ張り出して自分の糧にした　　つてところか？」

疑問系なのはスタークが今まで他人にこの事を説明した事がないからだろう。物事を自分で自己解決して他人に聞いたり聞かれなかつたりして深く考えず、そのまま放置している人のような喋り方だ。

「魔法に魂を使う術は無いのかい？」

「……一応、魔導士が用いる使い魔は人造魂魄を造り出して使役するものですが、魂そのものを使う術はありません」

あくまで人為的に造るだけ、とシグナムは付け足した。

使い魔は死した動物等を使って人造魂魄を造り、新たな魔法生物として誕生させる生き物である。新たに造るといふ訳だから死者蘇生ではなく（人ではないが）ほぼ別個の存在として扱われ主に従順な従者となる。

闇の書の守護騎士達と似て非なるものである。

「なるほどね。まあアンタ等の魔法ってどっちかっていうと超科学って感じだからな」

「ちよつと、待てよ」

頭を掻きながら1人で納得しているスタークにヴィータが待ったをかけた。  
まるで理解が出来ない、納得が出来ないという顔がありありと浮かんでいる。

「魂を喰らった」って……湯呑に魂なんてあんのかよ？」

魂を使う術は無くとも、知識ならばある程度持っている。  
精神、気力、生命そのものといった有るかどうかわからない、不確かなもの。

この際魂が確立した存在であるかどうかは置いとくとして、魂とは生物に宿るものだ。湯呑のような無機物に宿るものではない。

だが

「なんだ？湯呑に魂は無いと思ってたのか？」

「え」

と、あっさり疑問を返された。ヴィータだけでなく他の3人も呆けたような顔になる。

「魂が生物にしか宿ってないって思ってるならそいつは間違いだ。有機物、無機物を問わずあらゆる物には魂が宿っている。水にも空気にも鉄にも　そして湯呑にもな」

そんな事言われても直ぐには信じられないだろう。

魂が宿っているということは“生きている”ということに他ならな

いのではないかという疑問が湧いてくる。

スタークの言動を信じるならば、目の前の座卓テーブルにも、今着ている服にも、今居るこの家にも魂が宿っており“生きている”ということなのか。

「そんなに不思議がる事かい？俺たちが今生きてなきゃ、こうして会話ができる事は勿論、自分以外の人間や物が存在してるかどうかもわからねえだろ？無機物だって同じだ。俺たちが生きて、認識し、存在を認めてるからこそ無機物にも“存在意義”“真心”って言った魂が宿る。当たり前前に感じているからこそ、その感覚が鈍ってるんだ。

そうだな・・・・・・・・・・・・・・・・例えば嬢ちゃん」

「な、なんだよ」

自分が尋ねられると思わなかったのか、たじろいでしまうヴィータ。

「お前さんが使ってる武器      デバイスって言ったか？それを使ってる時“他のデバイスよりも使いやすい”とか“誰よりも自分が一番このデバイスを上手く使える”って思った事ねえか？」

「そりゃ・・・・・・・・あるけど」

「そいつはただ単に長い事使ってたからなんて理由だけじゃねえ。

お前さんがそのデバイスの魂を理解してるっていう何よりの証拠だ」

・・・・・・・・何となくだが、理解出来た気がした。

騎士は自身の武器に誇りと命を懸ける。

ヴィータのデバイス【グラーフアイゼン】は長い時の中で共に戦った戦友と言える存在だ。それに魂が宿っているとされれば、少な

くとも湯呑よりは納得できる。

「・・・スターク殿の力の事は大体はわかりましたが、なぜスターク殿はその力を使う事ができるのですか？それに先ほどの“ガキドゥ”というのは一体　？」

「・・・・・・・・・・・・六道輪廻って知ってるか？」

「？」

「リクドウ・・・・リンネ？」

見慣れない力、聞き慣れない知識が立て続けに並べられ、さらに追いつき打ちをかけるように新たな単語を聞き、正直4人はパニック寸前に陥るがスタークは話を続ける。

「人は死ぬとその生前の行いによって六つの世界のいずれかに生まれ変わる事象の事だ。

“天道”　　“人間道”　　“修羅道”　　“畜生道”　　“地獄道”  
　　んで“餓鬼道”。

この世界のいずれかに転生し、新たな人生を歩む。それが“六道輪廻”だ。

俺はその六道輪廻を繰り返し、六つの世界からそれぞれ六つの力を手に入れた。“餓鬼導”はその内の一つだ」

「・・」

「・・・・・・・・？」

ポケーっと

空いた口が塞がらないとはこの事かと4人全員が呆けた顔をした。いきなりこんな事言われれば当然だが。

4人が呆けたのは信じられないからではない。

「何だい？その可哀想な人を見るみてえな顔は？」

「いえ、その……」

「な、なんとというか……」

この話が本当ならスタークは何度も死に、何度も生きてきたという事になる。命は一つしかないのが常識だ。スタークの話では死なないわけではないが何度も生き返ると言っても全く過言ではない。疑う気持ちだっただけであつたが

それよりも……何よりも……

これではまるで闇の書ではないかという思いの方が強かつた。

「……んな話を信じろっていつのか？」

「信じる信じないは自由だ。それで何かが変わるわけでもない。とにかく俺にはそういう力があるって事は覚えとけ」



そう言ってからスタークは説明を再開させる。

「さっきやって見せた“餓鬼導”は文字通り“餓鬼道”の世界で得たモノ。」

能力は魂を“喰らう”力だ。喰らう事によって対象の魂を消失させる。力加減で消失させずにすむこともできるが、その場合は対象がかなり弱ったり脆くなったりする」

「それでさっきの湯吞が消えたんですか……」

この力も闇の書のリンカーコア蒐集能力に似ている部分だと4人は思った。しかも魔力資質のない人間、はては物体まで喰らう事ができるとなると闇の書よりも凶悪かもしれない。

「アンタ等が魔力とやらと一緒に“ナニか”が供給されてるって言うってたが、そいつは多分リリネットの魂だろうぜ。無意識に魔力共々渡しちまってるんだろ」

「え！？それって不味くないですか？」

スタークの説明でも分かったが魂は生きるために必要なものなのは間違いない。それを渡しているとなると命の危険が有るのではと考えたが……

「いや、問題無い。俺のガキだからなのか、コイツ（リリネット）は生まれた時から魂が俺よりもバカみてえにデカいし、六導輪廻すら使える。人為的に魂を枯渴させようとしなにかぎり絶対に死ぬなんて事は無い」

「あ、主も使えるのですか？」

「ああ、前にコイツ餓鬼導を使ってこの家の魂を半分も喰らったんだ。まあ何とか半分残ってたから元には戻せたが・・・危うく住む所無くなるところだった」

心底疲れた顔をしてスタークは言った。

「戻した・・・・・・・・それも六導輪廻の力の1つですか？」

「そうだ。まあ他のヤツは機会があつたら紹介しよう。アンタ等もこれ以上話すと理解が追いつかなくて混乱が増すだけだろうし、いい加減眠いし、リリネットをちゃんと寝かせなきゃいけないし」

・・・・・・・・・・・・・・・・面倒クセえし」

「結局最後ソレかよッ！！」

ヴィータが突っ込むがスタークは意にかえさずにリリネットを抱えながら立ち上がって伸びをした。他の五つの能力も気になるがスタークの言う通りすでに時刻は深夜をすぎている。自分達はともかくとして主にはちゃんとした寢床で寝てもらわないと不味いだろうし自分たちもこれ以上聞くと訳がわからなくなるかもしれない。そう判断して守護騎士達は話を打ち切る事にした。

「あー、流石にその格好で寝るのはマズイか・・・ちよつと待ってる今浴衣持つてくる」

そうして話を打ち切り、スタークは奥の部屋へと赴いた。



容姿に和風の服というギャップ効果が相成って普通とは違う清楚な色香を漂わせていた（特に胸が）。

ザフィーラは浴衣から覗かせるガタイの良い胸元付近の筋肉がとてもダンディだ。

ヴィータは小さい体に纏っている浴衣だが今の彼女の状態は所謂“着られている”状態であり、妙な保護欲を湧きあがらせ何とも可愛らしい雰囲気になっている。

着着の後は各自の部屋へと赴いた。スタークの言うとおり部屋は多くあり、適当に隣り合う様に部屋割りを決めた。そして布団の敷き方を教えてもらい就寝に至ったのである。

そして話は冒頭へと戻る。

あれから30分くらいたっているがまだヴィータの脳は活性化している。

回想した末で考えるのは“六道輪廻”についてだ。何度も転生して様々な世界と時代に生きてきたと言っていた男。【闇の書】の機能と類似した力を持つという彼にヴィータは他人事とは思えない気持ちでいた。

聞いた時は疑っていたが、回想してみるとやはり自分の中に巡っている何か      リリネットの魂を感じる程にそれ以外に説明の仕様が無い事に行き着いてしまう。

（闇の書の説明してる時、妙に納得が早いと思ったけど、アイツも親近感みたいなのを感じたのか？）

ヴィータはスタークについて考えてみる。彼の性格からして【闇の書】を仕様      悪用しようと考えとは思えない。説明した通

り【闇の書】は後にも先にも使えるのは主のみ。血縁者だからといって使えるものではない。

（……アイツの場合面倒くさいから使わなそうだけどな……）

話した時間は決して長くはなかったがスタークの性格は怠惰という印象が凄くねずいた

一時、真面目に守護騎士達を論じたがそれはホンの僅かなものだろう。

ヴィータの彼に対する第一印象は最悪でも無いが良くも無いという微妙なものだった。他の3人はどうだろうと考えいたら

『ヴィータ、起きているか？』

『ン、シグナム？』

噂をすれば何とやら、といった感じでシグナムがヴィータに念話を送った。

『ヴィータちゃんも起きてたのね』

『って、シャマル？』

『全員起きていたか』

『ザフィーラも……』

シグナムだけでなくシャマルもザフィーラも起きていた。彼等も眠れないのか。

『どうにも寝付けなくてな。先程の事が頭から離れん』

『それに、こうして別々の部屋で寝るのも、ちゃんとした所で寝るのもあまり無かったものね』

歴代の主達は闇の書の存在を他の者に（特に時空管理局に）隠匿を謀るために普段は部屋に一緒たくって閉じ込め、リンカーコア蒐集の時のみ外に出すといった扱いがほとんどだった。酷い時には部屋どころか地下牢に閉じ込められた事もあった。全ての主がそうだった訳ではないが、そうじゃなかった場合など片手の指のみで数えられる程だ。

そういつた事情が有るが故にちゃんとした所で寝るのに逆に違和感を感じてしまい、落ち着かないのだろう。

『・・・なあ、みんなはアイツの事どう思う？ “六道輪廻”なんて有ると思うか？』

これ幸いにとヴィータが皆に尋ねた。折角全員起きているのだから聞いてみようと思ったのだ。

『信じ難くはある・・・が』

『私たち自身も何度も主の元に転生しているもの。スタークさんがそうじゃないと言いつれ切れないわ』

他の守護騎士達も彼に疑いよりも親近感を感じている様だった。今まで【闇の書】に近い存在がいなかったのも手伝っているのか。

『だがそうになると、益々我々の存在を管理局に知られる訳にはいか

なくなつたな……主はもとよりスターク殿の事が知られれば【闇の書】同様にロストログリア扱いにされる可能性がある』

魔法とは違う未知なる力。

魔法が全てといった存在である時空管理局は彼の力を研究したがるか、もしくは危険視するか……どの道碌な事に成らないだろうと容易く予想がつく。

自分達がそうであつたのだから。

『それに関しちゃ同感だけどよ、これからの行動はどうすんだ？』

蒐集を行うか

ヴィータは暗にそう言っている。

『……スターク殿の言葉も一理ある。それに主が闇の書  
の力を望んでいるかどうかは誰にも分からんだろう？』

『そりゃ……そうだけど』

ヴィータとてスタークの言葉には納得するものがあるとなつてい  
る。

だが、やはり主以外の者の言葉に従うのは気に入らないと思つてい  
る。

『お前の気持ちもわかる。だから何年後になるかはわからないが、  
主が物心が付くまでは護衛のみに徹してその後改めてに主に御命  
令を仰げばいい』

と、私は考えているがお前達はどうか？』

『ええ、私はそれで構わないわ』

『問題ない』

将の提案にシヤマルとザフィーラは相槌を打つ。役割も人柄も交戦的ではない2人は異を唱えなかった。

『ヴィータ、お前は？』

『……いいよそれで』

渋々とヴィータは言った。自分が反論しても何にも良い案が無いから仕方なしといった感じだ。

とりあえずは後回しの様な感じに話は纏まり、守護騎士達は再び布団の中に意識を戻した。

今までとは違う主。

これから起こる出来事も今までとは違うものになるだろう。

そんな興奮のような、不安のような、よくわからない思いを抱きながら守護騎士達は眠りについた。



第3ページ 同類？（後書き）

月曜からテスト期間でしばらく更新できません）（：「「「

申し訳ないありません）「「「<

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4358ba/>

---

夜天の主は赤ん坊？

2012年1月15日01時52分発行